

遠隔126,000kmのチェスと切手

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政経資料センター 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉野, 英俊 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10354

遠隔 126,000 km のチェスと切手

吉野 英俊

チェスはドイツで覚えた。ケルンの下宿先の男がこれに芯からのめりこんでいて、ハイライトの箱の裏面を利用して作った日本将棋を教える代わりに、これを習った。この男は、泊りがけでやってくる近所のチェス狂いを連夜果敢に迎え撃っていた。一勝負50ペニヒを賭けては夜通しやっていた。将棋に比べれば単純至極。駒数は少いし、死んだ駒が甦ることもない。私は習った翌日からもう会話学校の米人、仏人、伊人を撫で斬りにした。ドイツを発つ時に我が師は子供の頃から使っていたという二つ折りのチェスの盤を愛弟子にくれた。日本に戻ってからもケルンの師との航空便によるチェスは続き、4年後にやっと一局の決着を見た。今はボーデン湖畔の小さな町 Spaichingen に住む、その弟との勝負が続いている。彼には会話学校の宿題をやらしてもらった一宿一飯以上の恩義があった。そうしてもらうことによって私はケルンの町を見物する時間がふえたのだ。そのお礼の意味もあって彼とは裏庭のパラソルの下で、暗くなって駒が見えなくなるまで幾度となく対戦したが、私は一度も負けなかった。その後、彼は一念発起して彼の通う学校の Schülerkreismeister (学生名人の小型版か?) になり、昨年、団体戦ではあるがソヴィエトチームに次いで世界第2位の成績をおさめた。自信とは恐ろしいもので、目下私の Dame (女王) はもはや盤上になく、苦戦を余儀なくされている。直線距離にして約 126,000 km のケルン・東京間のチェスはもう7年目を迎える。

すでに往復書簡はポケットスクラップで6冊ほどになり、そこに貼られたドイツ切手を収集するという新しい趣味も生まれた。これも今では日本切手にまで波及し、子供の頃手元にあった切手を少しずつ買い戻している有様である。一度でいい、ボーナスをはたいて切手を買える日が来ることを夢みている。